

## 介護福祉実習におけるラベルワークの意義と効果 ーラベルワークを介護福祉実習に取り入れてー

Meaning and effects of the label work in care and welfare practices  
ーThe label work is taken to the care and welfare practicesー

山下 恵子

Keiko YAMASHITA

尾台 安子

Yasuko ODAI

### はじめに

介護福祉士養成教育における介護福祉実習の位置づけは、学内での基礎的知識を統合し、実践を通して、介護を身につけていくことにある。介護は対人援助である。学生は実習を通して利用者をはじめ介護スタッフその他のスタッフとのかかわり合いの中から多くのことを学びとっている。その学びを単なる体験談としてではなく、学びを学生自身の中に意味あるものとして位置づけ、誰にでも理解できるような形として残し、他の学生たちと各自の学びをいかに共有ができるかということが実習後の指導において重要になる。しかし、各期の実習に向けての実習指導や実習後のまとめの時間は確保されているものの、その授業は決して活発であるとはいえず間延びした雰囲気のうち終わることが多い。そして実習においても「何かをした」という単なる体験談にとどまっていることが多い。また学生は、自分の頭で考えたことを文章表現することが苦手である。言葉で話せてもそれを文章にしていけることが出来ない。

そこで、学生に介護福祉実習中に学んだことや気づいたことの感想ラベルを日々記録させ、実習後の指導の中にラベルワークを取り入れる試みをしてきた。ラベルワークは“参画理論”の考えにもとづいた授業を参画授業と呼ぶ。これは「学生自らが行動を起こさなければ学びが発展しない仕組みを作り、そこから学びに対する積極性・能動性・主体性を引き出そう<sup>1)</sup>」という林によって創出されたものである。この理論を介護教員研修の中で学ぶ機会を得た。そこで、本学の実情を考慮したうえで独自のまとめ方を工夫してラベルワークを取り入れてきた。実習中書いたラベルを基に、実習を振り返りながら、さらに言葉を添えながら図解していく。はじめは何をどのようにまとめていくか混乱していた学生たちも何度か繰り返して行なううちに、思考を深めていくことができた。実習を振り返りながらのラベル図解は、学生たちの思考を整理するとともに、個人が感じ取ってきたものを意味あるものとして自分の言葉で表現できるようになる。そこで、介護福祉実習にラベルワークを取り入れてきた効果を分析し、有効性を明らかにすることができたので報告する。

### 1. ラベルワークとは

#### (1) ラベルワークの目的、意義

ラベルを用いて学ぶ方法は、社会教育や学校教育、ビジネス界において頻繁に用いられている。ラベルワーク (Label Work) というと、KJ法をイメージするかもしれないが、1995年頃から林が用い始めた言葉である。林はラベルワークを、「人間の知的活動、とりわけ知識の発

信・交流および（知識生産のための）図解思考の道具（媒体）としてラベルを用いる理論と技術の体系」と定義している<sup>2)</sup>。具体的には、ラベルには主語と述語をもった文章で書くことが重要になり、完全な短文表現をとること。ラベル1枚には1項目のことだけを表現すること。そのことによりラベル1枚の中に一つの主張が記載されることになる。一つの知識を誕生させたことになる。文章にすると書いたひとの説明がなくても一つの主張を表わす。この一人ひとりの主張を1枚1枚のラベルに載せて、目で見ながら手で操作して、交流し、思考しながら、ラベルの主張を生かす方法を考える技術と理論の体系がラベルワークの本質である。

ラベルワークでは、ラベルを用いて情報・知識の交流（コミュニケーション）を行なうことと、ラベルを用いた図解づくりの思考を促進することで、知識の創出の支援を行なうもので、ラベルを用いた知的活動である。ラベルを思考の単位として情報のやりとりをして共有化し、図解して思考を進め知的産物に作品化する技法である。

ラベルを用いた図解思考の優れた特色として、①全体像を一目で俯瞰できる。②部分と全体とを同時に把握できる。③全体を見ながら、注目した詳細部を点検できる。④目と手を使って実感できる。⑤思考のプロセスと思考の成果を同時に把握できる。⑥個人思考にも集団思考にも有効である。⑦思考の文節化が自由にできる。⑧技術として累積的な研究開発ができ、共有化できる。⑨図表化された図解を用いて、縮小化、口頭発表、図式化、文章化など多様に活用できる。⑩図解づくり、口頭発表、図式づくり、文章づくりなど有効なツールとして、かつ訓練のツールとして活用できる。これらのことが挙げられ、多彩に活用することが可能である<sup>2)</sup>。

このラベルワークには「ラベル交流技術群」と「ラベル図考技術群」があるが、実習指導の実習事後指導では、後者を用い、図解づくりを行い、縮小化して、口頭発表する過程まで行った。

## 2. ラベルワークのすすめ方

最初に書いたラベルをもとラベルと呼び、何枚かのラベルの間に、同質性・関係性・物語性に注目してラベルのかたまりを作っていく。かたまりを作るときに色紙に載せていくのでそれを皿と呼ぶ。一つの皿の上にラベルが何枚か乗せられてくると、そのお皿の意味することを文章表現する。それを看板と呼んでいる。この作業と思考を繰り返していき、ラベルの図考をしていく。

実習中での取り組みとラベルワークの進め方と思考過程を整理してみた。

## &lt;実際の作業&gt;

(実習中)

**もとラベルづくり**

毎日の実習中に気づいたことや学んだことを他人が読んでも意味がわかるようにラベルに1~2枚残す。

(実習後)

**小皿作り**

実習中のラベルを見直ししながら、自分が実習中にどのようなことに気がついているのかについて同じことを書いている、または似たようなことのラベルを集めて、カラーの用紙に載せる。

手持ちのラベルがすべてなくなるまでこれを繰り返す。単独のもとラベルも一枚のお皿に乗せる。無理に集めない。

**看板づくり**

小皿ごとに、テーマに対するもとラベルの意味を書く。小皿にあるすべてのラベルが共通にしている隠されたテーマに対して、共通の意味を単語や句ではなく、1つの文章で表現する。  
もとラベル1枚の皿にもテーマに対しての意味を看板として書く。

**小皿と小皿の統合(中皿作り)**

小皿の看板の意味が似ているもの、共通性のある皿を集める。さらに大きなカラー用紙に載せていき、それぞれの看板に共通した意味を表現した文(中看板)を書く。小皿作り、中皿作りの際、新たな考えや発見が生まれたら、新ラベルとしてどんどん追加する。皿の看板の内容に合わせて、自由な形に工夫して切る。

## &lt;思考の過程&gt;

毎日の実習の中で今日一日どのような学びがあったのかを意識化する。

→ **学びの意識化**

自分の気づきの内容の類似性や内容を読み取る。

→ **意味の読み取り**

一枚一枚のラベルは自分自身の気づきや学びであり、それを表現するものであるので、大事な一枚一枚であるということを認識する。

小皿にあるラベルに共通にしている隠されたテーマがどんなことであるのかを、ラベルと対話しながら考え、意味づけを行い、自分がどのようなことに気がついているのかを表現する。

→ **学びの言語化**

さらに、小皿同士を統合し、どのようなことをいわんとしているのか、自分の考えを統合し表現する。

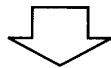
→ **学びの統合と再言語化**

**場づくり**

A3用紙(模造紙)という「場所」の上に、お皿を空間は位置して“場”を作り出す  
模造紙の上に、看板の内容が近いものは近くに、遠いものは遠くに配置する。すべてのラベルが活かされるような皿の配置を考え、“場”を工夫する。

**関係線づけ**

皿と皿の関係を考え関係線をつける。線は因果関係(→)、対立関係もある。関係線には、その間系の意味を書き加えるなどしてさらに“場”を生き活きとさせる。

**タイトルづけ**

出来上がった図解を見ながら、最終的にこの図解がいわんとしていることを一文で表す。  
タイトルはテーマの答えとなるように導く。

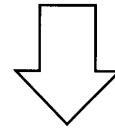
**図解に磨きをかける(添付図解参照)**

イラストを書き込んだり、比喩や物語でまとめると楽しくなる。ちょっとした解説や、添え言葉を自由に書き加える。  
模造紙の右下に作成日時、名前、ラベル枚数、テーマを書き加える

**発表する**

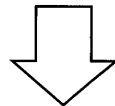
作成した作品を前に、その成果を発表する。

他のお皿との関係性の見極めと思考の整理をする



思考の関係付けの表現化をする

→ **思考の調整と整理**



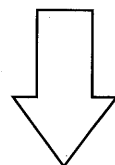
すべての思考(学び)の統合と言語化する

→ **思考の統合化と言語化**



思考のイラストや物語化による創造

→ **思考の創造化**



自分の思考過程を他の人にわかりやすく説明する

→ **思考の伝達**

### 3. 感想ラベルの整理統合の実際

テーマを『実習で学んだこと、考えたこと、思ったこと』として、実習中に毎日1～2枚感想ラベルを書くこととした。ラベルにはポストイットを用いた。一枚の感想ラベルには、日付と氏名を必ず記入し、1つのことを30字から50字の一文で書くように心がけ、書きたいことがいくつかある場合には、2枚3枚のラベルに分けて書くようにする。また、ラベルの内容はなるべく具体的に、他の人が読んでも意味がわかるように表現する。テーマ（問い）の答えになっているかということを意識して書くようにする。A学生の実際の感想ラベルを用いて分析をしていく。学生Aのラベル枚数は24枚であった。

感想ラベルを読み直しながら、同じことを書いている、また似たようなこと書いているラベルを集めてカラー用紙（小皿）に載せ、手持ちのラベルがなくなるまでこれを繰り返す。ラベルは無理に一緒にする必要はなく、単独ラベルも大切に扱い小皿に載せる。1枚の小皿に乗っているラベルが『共通にしようとしていること—隠された共通の意味』を単語や句ではなく、1つの文章で表現する。これを看板という。

以下に示したように、何枚かのラベルを集めた小皿の看板をすべて作る。学生AはA群1～3、B群1～4、C群1～2、D群1～2までの3の群で11枚の小皿に看板をつけている。

#### ①A群

##### A-1

看護師による医療行為も一人ひとりの体に合わせた方法が大切であり、その方の命を守る大切な行為である。

- ・褥瘡の処置はぬるま湯で洗い流すことで、皮膚を清潔に保つ。
- ・尿量の多い方は尿がパットにしみて臀部についた場合、ガーゼだけだと不衛生なのでラップを当てる。
- ・口腔ケアはイソジンを用いて爽快感や殺菌作用を持たすようにする。
- ・下剤を服用し、効果がない方は、摘便、浣腸をして排便を促す。

##### A-2

介護士は、同じ介護士とはもちろん、あらゆる職種と情報の交換など連携し。それに基づき一人ひとりに合った介助をしていかなければならない。

- ・介護士は単独でなく、Ns、OT、PT、Drなどあらゆる職種と連携してその方にあった介護を考え行っていかなければならない。
- ・前回退所前としばらくして入所してから現在までは身体や心理状況が変わっている事があるため、細かな変化に気づき、スタッフで報告し合い統一した援助をしていかなければならない。

## A-3

あらゆる職種から、その方のあらゆる情報を取り入れた上で、介護士としていつでも一人ひとりに目を配り、身体、心理状態を観察し、安心してもらえる介助を行っていかなければならない。

- ・トランスファーは、介護者があわてたり不安な気持ちでやると利用者にも伝わり、恐怖心を感じさせてしまう。
- ・介護者は常に利用者の方の具合の様子、急変や変わったことはないかなど、常に気にかけて観ていかなければならない。

## ②B群

## B-1

痴呆の方にとっては、特に“今”が大切で、今をどう楽しく生活してもらうかを考えかわっていくことが大切。

- ・痴呆の方で自分はどこに行けばよいか、何をすればよいか不安に思っているかたもいるので安心できる声がけやかかわりが必要。
- ・入浴の時、痴呆の方で拒否する方がいてどう声がけしたら安心してもらえるか悩んだ
- ・帰宅願望が強い方との関わりは、逆効果になってしまわないよう、距離を保ちながら工夫された対応が必要である。
- ・痴呆の方にとっては、今をどう有意義に落ち着き安心して生活してもらうかを考え援助することが大切。

## B-2

お年寄りにとって自分の昔のことを思い浮かべながら話すことは、昔を懐かしみ、再び当時の政界に入って落ち着いて過ごしてもらうことができる。

- ・ライフレビューブック作成で昔のことを語る利用者の方の表情はとてもよく、落ち着いていた。
- ・ケアプラン、ライフレビューブック作成で利用者の方は今までになく楽しそうに声に出し、自然に笑ってお話してくださりうれしく思った。

## B-3

利用者の方の生活の場を清潔に保つことや少し変えてみたり、レクレーションなどで心や体に刺激のあることを行う時間を持つことで日々の生活に変化や「メリハリをもったり表情を豊かに楽しく生活できる。

- ・環境整備は、利用者の方が気持ちよく寝たり、心地よく居室で過ごすために大切なことである。
- ・レクレーションは、利用者の方の表情を豊かにし、普段の会話では見られない良い面を引き出すことができる。
- ・午前の体操は利用者にとって気持ちをリフレッシュさせたり、1日の生活に意欲をもたせたりする効果がある。

## B-4

できるだけご本人の意思に合わせた生活をして頂くことが、施設での生活を心地よく感じてもらえることにつながるのではないだろうか。

- ・入浴で女性が異性に介助されることに対し、「初めはヤダかったけどもう慣れた」と言っている方がいた。
- ・入浴を拒否するのは、他者に勝手に入浴時間を決められ、入りたいときに入れないことや裸になることに対する不安感や恐怖感、羞恥心などからではないか。

## ③C群

## C-1

心を許せる存在は誰にでも必要であり、それを実感できることでその方の表情も心持ちも変わる！！

- ・受け持ちの利用者の方の良い表情で少しずつ心を開いて下さっていることがわかった。
- ・受け持ちの利用者の方は、他者に話すとき、ほとんど敬語である。自分の本音を出していなかったり、心を許しきれていない面があるのでは？
- ・受け持ちの利用者と信頼関係ができていることが利用者の方の表情から実感できてよかった。

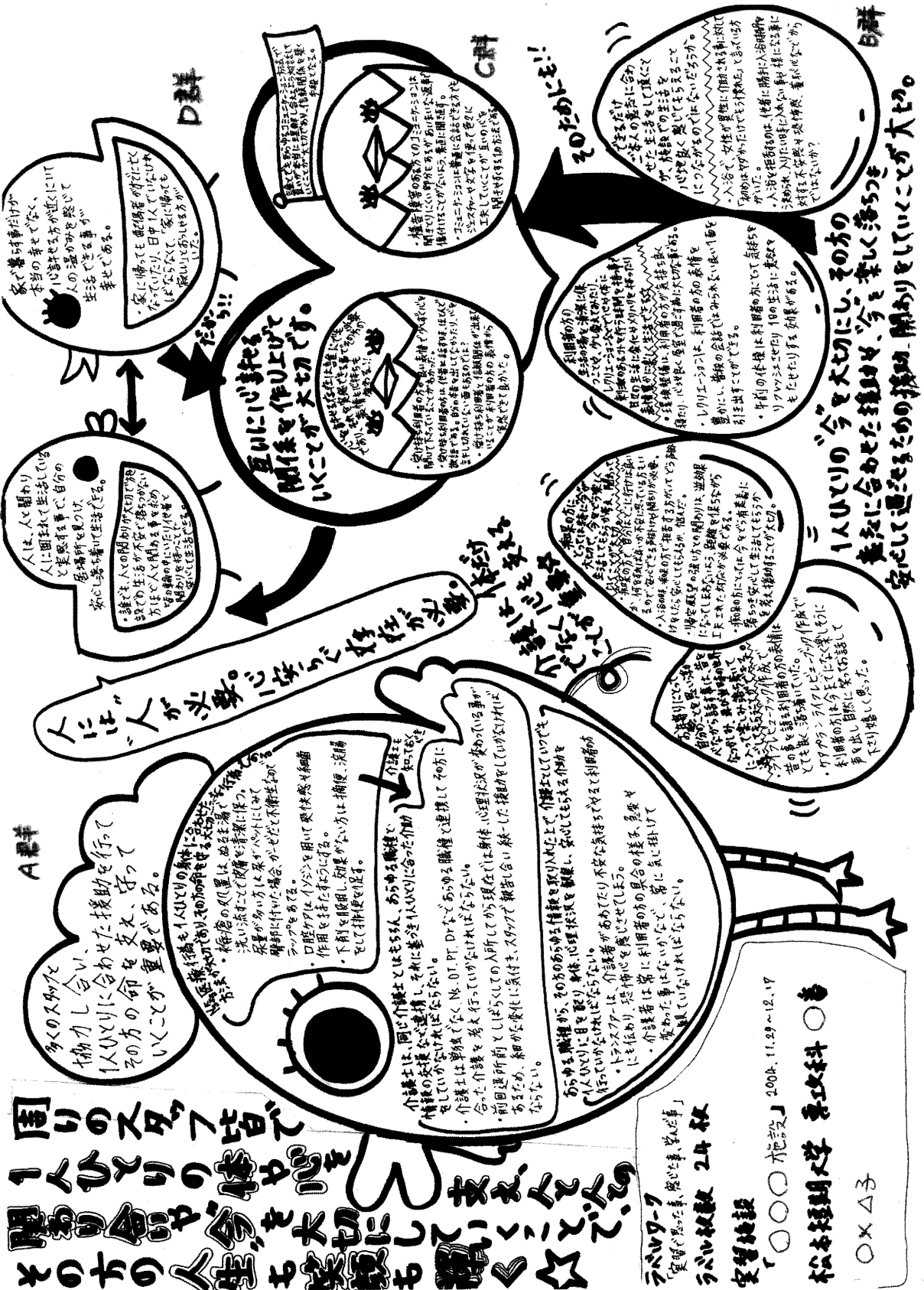
## C-2

誰とでもあらゆるコミュニケーション方法でお互いが本当に理解しあえるよう対話していくことが大切であり、信頼関係を築く手段となる。

- ・構音障害のある方とのコミュニケーションは聞き取りにくい部分もあるがあいまいな返事で傷つけることがないように、素直に聞きなおす。
- ・コミュニケーションは普通に会話できる方でもジェスチャーや文字を使っていろいろな工夫していくことがお互いの心を開きやすくする一つの方法である。



ラベル図解（縮小版）実施例



## ④D群

## D-1

人は、人と関わり人に囲まれて生活していると実感する事で、自分の居場所見つけ、安心して落ち着いて生活できる。

- ・誰でも、人との関わりが大切で、施設での生活が不安で落ち着かない方ほど人とかかわる事を求めみんなの和の中にいたり、他者との関わりを持つことで安心して生活ができる。

## D-2

家に暮らすことだけが本当の幸せではなく、心許せる方が近くにいる人の温かみを感じて生活できることが幸せである。

- ・家に帰っても配偶者がすでに亡くなっていたり、日中ひとりで過ごさなければならなくて「家に帰っても寂しい」とおっしゃる方がいた。

## 4. ラベル図考の実際（縮小版参照）

小皿のときと同様に中皿にも小皿の看板の意味を読み取り、意味の似ているもの、共通性のある小皿と小皿を集め、中皿に載せる。それぞれの看板に共通した意味を表現した文（看板）を書く。さらに中皿と小皿、中皿と中皿で大皿として新たな看板を作ることもある。（学生Aには大皿はない）

中皿や小皿の空間配置を行い、関係線をつけて、関係線のそばにはその関係の意味を書き加える。

## 1) ラベル図考の分析

## ①A群（図：にわとり）

学生Aは、ラベル枚数24枚の中から、11の小皿、3つの中皿を導き出し図解をしている。図解は、にわとりを用いて親鳥を中心にさまざまな看護ケアから学んだことを「医学的な知識や一人ひとりの体に合わせたケアの必要性はすべて命を守るための行為である」としている。また、他職種と情報交換や連携の必要性と他職種からの情報を介護の中に取り入れ一人ひとりの状態の観察とそれに合ったケアの重要性を導き出し、他職種との連携も介護にとって必要であるとしている。さらに、“一人ひとり”という言葉が共通のキーワードとして使われ、利用者の個性の重要性を感じ取っている。にわとり（中皿）の看板として『多くのスタッフと協力し合い、一人ひとりに合わせた援助を行ってその方の命を支え、守っていくことが重要である』とし、施設スタッフ内の協力体制と一人ひとりに合わせた援助、および命を支えることの大切さを導き出している。

多くのスタッフと協力し合い、一人ひとりに合わせた援助を行ってその方の命を支え、守っていくことが重要である

- ・看護師による医療行為も一人ひとりの体に合わせた方法が大切であり、その方の命を守る大切な行為である。
- ・介護士は、同じ介護士とはもちろん、あらゆる職種と情報の交換など連携し。それに基づき一人ひとりに合った介助をしていかなければならない。
- ・あらゆる職種から、その方のあらゆる情報を取り入れた上で、介護士としていつでも一人ひとりに目を配り、身体、心理状態を観察し、安心してもらえる介助を行っていかなければならない。

## ②B群（図：たまご）

にわとりから生まれてきた「たまご」には、認知症の方々とのかかわりでは、“今”その時のかかわりが重要であることやその人の生きてきた歴史に目を向けることの重要性、生活環境を整えることや生活に刺激を与えることの必要性が導き出されている。また、入浴の場面でのかかわりからその人の尊厳を守っていくことについて気がつき、身近なかかわりの中から自分が体験してきたことの意味を見出している。学生Aは、認知症と精神障害を併せ持つ利用者を受け持っていたことや認知症の方々の棟での実習であったことで、“今”その時々のかかわりが重要な意味を持つことや尊厳を守ることをかかわりを通し強く感じていたと思われる。たまご（中皿）の看板として『一人ひとりの“今”を大切にし、その方の意志に合わせた援助や“今”を楽しく落ち着き安心して過ごせるための援助、関わりをしていくことが大切』とし、にわとりで表現されている介護職の役割は他のスタッフとの連携や命を守るといった身体的なケアだけではなく、その人の精神世界へ目を向けて、心を支えることの重要であることが「介護は体だけではなく心も支えることが重要」と具体的な言葉でたまごが生まれ転げ落ちる部分に補足説明を付け加えて表現されている。

一人ひとりの“今”を大切にし、その方の意志に合わせた援助や“今”を楽しく落ち着き安心して過ごせるための援助、関わりをしていくことが大切

- ・痴呆の方にとっては、特に“今”が大切で、今をどう楽しく生活してもらうかを考えかかわっていくことが大切。
- ・お年寄りにとって自分の昔のことを思い浮かべながら話すことは、昔を懐かしみ、再び当時の政界に入って落ち着いて過ごしてもらうことができる。
- ・利用者の方の生活の場を清潔に保つことや少し変えてみたり、レクリエーションなどで心や体に刺激のあることを行う時間を持つことで日々の生活に変化や「メリハリをもったり表情を豊かに楽しく生活できる。
- ・できるだけご本人の意思に合わせた生活をして頂くことが、施設での生活を心地よく感じてもらうことにつながるのではないだろうか。

## ③C群（図：殻つきひよこ）

たまごから出てきた殻の中のひよこで、利用者一人ひとりへのかかわりとして相手の気持ちをわかる実感とお互いの心の変化や確実なコミュニケーションの重要性を見出し、殻の中のひよこ（中皿）の看板として『お互いに心を許せる関係を作り上げていくことが大切です。』と利用者との心のつながりを表現している。

**お互いに心を許せる関係を作り上げていくことが大切です。**

- ・心を許せる存在は誰にでも必要であり、それを実感できることでその方の表情も心持も変わる！！
- ・誰とでもあらゆるコミュニケーション方法でお互いが本当に理解しあえるよう対話していくことが大切であり、信頼関係を気づく手段となる。

## ④D群（図：ひよこ）

その利用者の心のつながりの中から殻からでたひよことなり、その人の居場所の発見が安心感につながることや安心できる居場所が一人ひとり異なることに気がついている。この気づきの背景には、受け持ち利用者とのかかわりが大きく影響していると考えられる。喫煙をする方で、いつも決まった場所での喫煙がこの人が一番落ち着く場所であり、落ちつくひと時であった。その場所で学生がいつも一緒に利用者とともに時を過ごし、そこでのかかわりが学生自身にとっても安心感が得られる時と場所であった。殻から出たひよこ（中皿）の看板として『人には“人”が必要。心やすらぐ存在が必要』であるとして、一人ひとりとの心の結びつきや介護者としてではなく一人の人間としての存在の意義にまで気がついている。たまごから殻つきひよこ、ひよこへと学生自身の成長とも重なりあう図解である。

**人には“人”が必要。心やすらぐ存在が必要**

- ・人は、人と関わり人に囲まれて生活していると実感する事で、自分の居場所見つけ、安心し落ち着いて生活できる。
- ・家に暮らすことだけが本当の幸せではなく、心許せる方が近くにいる人の温かみを感じて生活できることが幸せである。

## ⑤ラベル思考から得たテーマの答え（タイトル）

ラベルワークを行いラベル図解してきた中から、テーマである「実習で学んだこと、思ったこと、考えたこと」の答え（タイトル）として『**周りのスタッフ皆で一人ひとりの体や心を支え、人と人との関わり合いや“今”を大切に**していくことで、その方の**人生も笑顔も輝く**』という結論に至っている。看板に出てきている“一人ひとり”というキーワードや“今”このときのかかわりの重要性を導き出している。

#### ⑥ラベルワーク終了後の学生の反応

ラベルワークを行った後の学生の感想として、「介護観について」「自分自身への気づき」「他者への気づき」「利用者に対しての気づき」があげられていた。「介護観について」では、“自分の学びをまとめることができ、介護について深く考えることができた”“実習を振り返り、自分の考えをまとめることにより介護観を見出し、これからの介護への方針になる”“自分の目指す介護とはどのようなものを再認識できる機会になった”“何を感じ、何を学んできたのか、自分にとって何が必要で介護者としてどう援助しかかわっていくべきなのかをはっきりさせることができる”などをあげ、自分自身が介護についてどのような考えを持っているかが明確になっている。「自分自身への気づき」については“ラベルワークでまとめることで自分の実習に対する思いが改めてわかったし、振り返ることができた”“利用者の思いをもう一度理解することで自分自身に足りないことが見えてきた”“実習中に感じたことや先生や職員からアドバイスをもらった内容を振り返ってみると、実習のときより実感することができた”“自分の気持ちや学んだことを文章に表して改めてそのときの思いや感じたことを思い出し、介護に対しての意欲がわいてきた”“その場では気づくことがなかったことなどにも気づけて視野が広がった”など自分自身の実習に対する思いや利用者に対しての思い、また利用者の思いを再認識している。また、発表を通して「他者への気づき」として“みんなの発表を見たり聞いたりすることで自分の気づかなかったことにも気がつかされて、こうすればよかったんだと改めて感じることもできた”“みんなの考えを知ることができ、この人はこういうことを考えているんだとか、クラスの皆を知ることにもつながった”“みんなが考えたり、思ったことを聞く機会があまりないので自分とは違った観点に気がつくことができた”などクラスの人たちへの理解につながったり、他の学生の新たな一面の発見や自分自身の視野が広がったことに気がついていた。「利用者に対しての気づき」については“自分のそのときの気持ち、利用者の気持ちをしっかりと取り入れていけた”“一人ひとりをいろいろな角度から見ていくことに気がついた”をあげられ、利用者に対してのより深い理解につながっている。ラベルワークの手技や表現方法については、“自分の考えたことを文章化することは難しい”“ラベルワークをすることで実習の中で学んだことや感じたことについての考えをしっかりと表現することができた”などの自分の思考力に対する感想が挙げられていた。

### 5. 考察

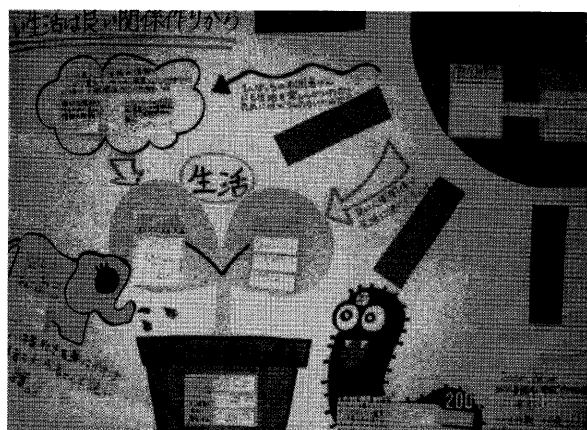
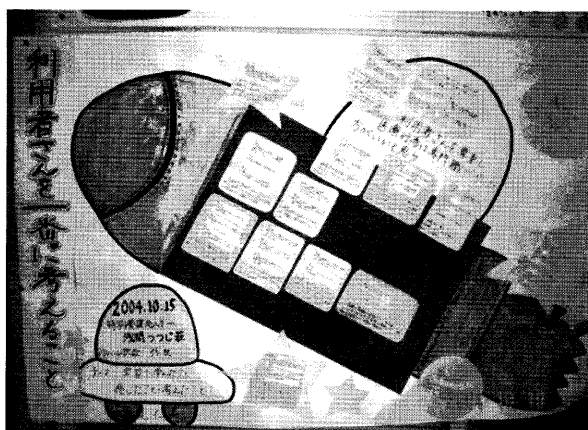
#### (1) 図解からみた学生の思考過程

##### 1) 実習の中での学びの認識と言語化の重要性

実習中に今日一日の実習で何を学んだかということを意識化し、ラベルに毎日残すことで実習における学びを認識できてきたと考える。まず、「ラベルに書く」ことから始まり、この「書く」ということが重要なことである。この小さなラベルに自分の感じたことや思いをまとめようとする作業は思考の整理を求めることになる。そのラベルをもとに、学生たちはラベルワークを通して、実習中の自分の実習を一枚一枚のラベルを大切にしながら振り返り、自分が実習で何を学んだのかを意識化でき、単に体験談としての学びではなく、実体験として言語化し、自己表現し、創造性を発揮し、ラベル図解している。<sup>1)</sup>林は、「ラベル思考は、直接的経験からデータを取り出して、そこから学

習を出発できる。しかも、そのデータを直接操作して、認識にまで、高める効果が（認識形成効果）がある。さらに、その効果を図解という形ある産物にまで仕上げることにによって、十分な達成感を味わう効果が可能になる。」としている。毎日の感想ラベルからにた者同士を集め、そこで自分がなにを見出してきたのかをひとつの小皿に載せられたものから必死にその中にある意味を考えている。自分の感じたことや考えたことを表現することが苦手な学生が多いが、このラベルワークをすることにより、自分の体験によって導かれたものを表現する文章を作り出し、それをいかに自分以外の人にわかるように表現するかに悩みつつも、図解の段階に入ると生き生きとどのようにこの学びを表現しようかと楽しみながら取り組んでいたことは、今までの授業の中では味わうことがなかった達成感が得られていたと考えられる。また、学生の感想でもあるように、利用者に対する見方や視野が広がったり、一緒に学んでいる仲間に対する新たな発見があることは大きな成果であるといえる。

今までの実習事後指導では学生の個性を感じるものが少なかったが、このラベルワークを通して、学生一人ひとりの豊かな表現力と発想の豊かさや創造力には毎回驚かされている。（写真1．2参照）なにより、ラベル図解に学生自身の成長の過程が表されていることにもまた新たな発見として挙げられる。これらの発見は、講義形式のものでは、絶対に発見し得ないものである。



## 2) 学びの場づくりの意義

学びの場には、ラベルワークで思考しながらラベル図解を行っていく学びの場と発表という思考の伝達の機会に学生同士が交流しあう学びの場がある。また、今回はグループという集団でのラベルワークは行わなかったが、集団の中での学びの場がある。これまで私たちはどの授業においても講義という一方通行の方法を中心に進めてきた。そしてそこで、“反応がない”学生たちというレッテルをつけてきたような気がする。しかし、ラベルワークにおいて学生が学びの主体になり、個人レベルでの学びの場づくりを行ったことにより、最初は戸惑ってどう表現していいかわからなかった学生が、自分の実習での体験と真剣に向き合いながら、思考を進めていくうちに、新たな自分や利用者の思いに気がついてきていた。そして、それをどう他人にわかってもらえるように表現するかという図解の段階には、学生の生き生きとした姿に接することができた。

学習とは一方的に何かを伝達されるものではなく、対話的關係の中で形成されるもの

である。また、主体的な自己表現の機会を設けることは、関係性の中で自己表現をしていかなければならない介護においては、利用者との関係、スタッフとの関係においても要求されるため、重要な体験である。学生はこのラベルワークを通して、介護実習の中で単に技術の修得のみのとらわれることなく、自分自身を見つめ、自分と利用者、自分とスタッフとの関係や自分自身の介護観にまで思考が及んできている。実習での学びを自分自身の貴重な学びとして、その場を作ることの意義は大きい。

### 3) 実習指導への活用 of 有意義性と課題

介護は対人援助であり、人との関係性の中で営まれていくものである。佐藤<sup>9)</sup>は、学生は実習においてかつて経験したことのない新しい、そしてさまざまな体験をする。その体験はその後の学生の行き方に影響を及ぼすほどの自己のゆさぶり体験でもあると述べ、実習体験は学生にとって人間的な成長の場としての意味を持つとしている。従来の実習教育は、学習者は主体的に学ぶということよりも一方的な講義形式に慣らされている。実習においても学生が転ばないようにしつつ教師や指導者が手や口を出してしまう傾向がある。しかし、このラベルワークを通して、体験を言語化する能力が高められ、体験を語る力をつけられる。また、体験の意味を探究する力を育て、体験と体験をつなぎ、統合する力を育て、直感的に推論する感性を育てている。さらに、教師が学生から学び、学生とともに成長することができると考えられる。これらのことを十分に発揮できるようにするためには、教師自身ももう一度教育方法について考えていかなければならない。今回のラベルワークの試みにおいて、学生の持つ主体性や発想力、創造力を実感することができた。学生自身の能力を引き出し、教師とともに成長できるのがこのラベルワークであると実感した。

ラベル図解の発表において、十分なディスカッションにまで至らず、学生同士の活発なやり取りにまでにはいたっていないことは残念なことである。今回は個人レベルでのラベルワークでしか実践できなかったが、今後は小グループでの実践を実施し、相手のラベルを大事にすることやその中に隠された意味を見出しあう体験、相手を認め尊重することも学生の学びには重要であるので、それらの学びの場のづくりにも力を注いでいきたいと考えてる。

### おわりに

利用者主体の介護の必要性が言われ、介護教育の場でも利用者中心の介護を学んでいるが、まだまだ介護者中心の介護の現場に埋没していく。「利用者主体」をいくら学んみても、学生たち自身が、「学生主体」の教育を体験しているだろうか、また身をもって体験しているだろうかが問われている。学生たちは自分たちの力を信じ、尊重し、それを伸ばしてくれる教育を受けてはじめて、利用者の力を活かす介護ができる。ラベルワークはその考え方を可能にするものである。

### 引用・参考文献

- 1) 林義樹 学生参画授業論 学文社 2002
- 2) 林義樹監修、金城祥教著 看護の知を紡ぐラベルワーク技法 精神看護出版 2004

- 3) 青山誘子、大石弘子他 経験型学習とラベルワークによる精神看護実習の展開 看護展望 Vol.26 No.6 2001 メヂカルフレンド社
- 4) 石塚淳子、佐藤道子他 「臨床の知」を育てる臨床実習指導 看護教育 Vol.42 No.2 2001 医学書院
- 5) 富澤美幸 ラベルワークを用いたカンファレンスの学習効果 足利短期大学研究紀要 Vol.23 2003
- 6) 今西誠子 小児看護学実習のまとめとしてのラベルワークに対する学生の認識 京都市立看護短期大学紀要 Vol.29 2004
- 7) 今西誠子 小児看護学実習における学生の学びとその評価 京都市立看護短期大学紀要 Vol.28 2003
- 8) 林牧子、村上愛子他 基礎看護技術におけるラベルワークの成果と学生の反応 京都市立看護短期大学紀要 Vol.27 2002
- 9) 佐藤道子：臨地実習における臨床知の形成に関する研究 第30回に本看護学会抄録集（看護教育）1999